青森市の埋蔵文化財　4

三内丸山遺跡調査概報

1970年

青森市教育委員会

発掘地域（北東から）

発掘地域（南から）

青森市の埋蔵文化財4

三内丸山遺跡調査概報

目　次

○ 序 …… 5

○ 三内丸山遺跡調査概報 …… 9

はじめに …… 9

遺跡の位置 …… 10

発掘経過 …… 11

出土品の概略 …… 12

土器 …… 12

石器 …… 14

土製品 …… 15

遺跡の性格 …… 15

おわりに …… 16

○ 発掘参加者一覧 …… 16

序

最近とくに地域開発により，宅地造成，道路工事，土地造成，農業改善事業等の諸工事がひんぱんに行なわれると共に，埋蔵文化財の破かいも多くなってきたことは誠に遺憾にたえません。

市内には数多くの縄文時代の遺跡が散在しており，これら埋蔵文化財の保護が開発と関連して緊急を要する課題でありますが，公益上やむをえない遺跡の破かいについては，事前に学術的な調査をし，記録保存の措置を講じなければなりません。

そこで当市教育委員会では，このままでは消滅の危機にある三内丸山遺跡の発掘調査を計画し，青森市文化財審議会及び研究者や市内の高校生の協力をえて実施することができました。

条件がそろわず充分な成果を上げることが出来ませんでしたが，ある程度当地方の縄文式土器文化の究明の手がかりとなる資料を得ることが出来たと思われます。

その結果が本書であり，今回「青森市の埋蔵文化財４」として刊行することになりましたが，今後も埋蔵文化財やその他の文化財に対しても保存とその活用に力をそそいで参りたいと存じます。

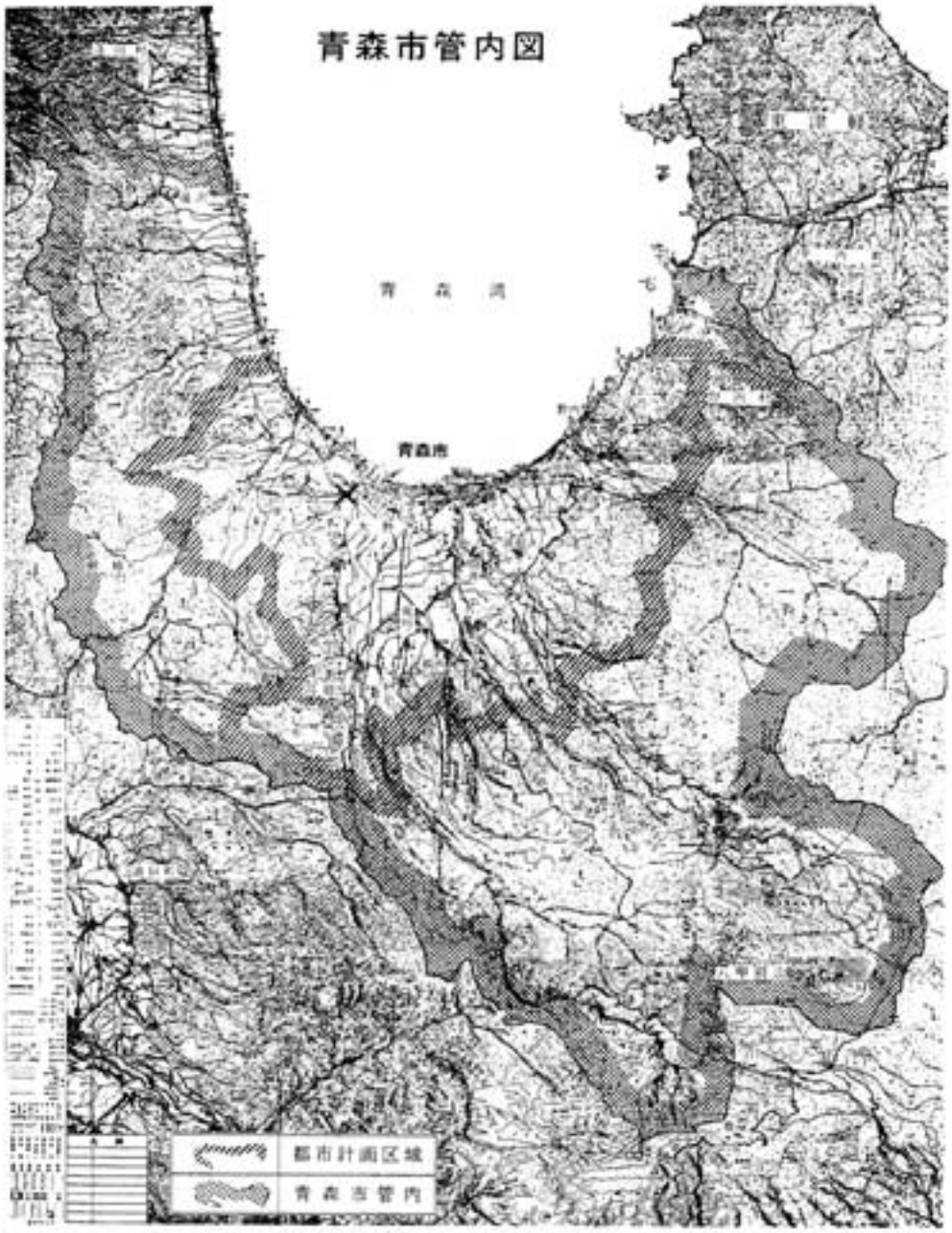
この書により，一人でも多くの人達が，埋蔵文化財に対する認識を深め，遺跡遺物等の保存に協力されることを願うものであります。

なお，この調査にあたりご協力をいただいた小野忠明，井上久両氏をはじめ多くの人々に深く感謝の意を表します。

昭和４５年７月

青森市教育委員会

教育長　杉　田　貞　作



青森市役所作成　　1/200,000

青森市役所作成　　1/2,500

三内丸山遺跡調査概報

〔はじめに〕

昭和41年度まで6ヵ年にわたって発掘調査し，概報を公刊した三内霊園・四ツ石・玉清水の各遺跡に引続いて，昭和42年度は三内丸山遺跡を発掘調査したが，今般その概略を報告する。

青森市小三内は，縄文式前期から中期までの遺物の包含地として著名な所で，今回の調査地から北東にあたる稲荷林（俗称押し流れ）は，昭和28年から33年まで前後4回にわたって，故成田彦栄氏と慶応義塾大学文学部教授清水潤三博士とが共同調査された遺跡の所在地である。多数の縄文式中期（円筒上層式）の遺物包含層の下層から前期（円筒下層式）の竪穴が現われ，考古学の道へ入りはじめで，この発掘調査に参加を許された筆者にとっては思い出の深い個所である。このような遺跡（遺物包含地）は，できることならそのままで保存しておくのが埋蔵文化財保護の立場からみて望ましいものである。しかし，昭和41年度の全国高等学校総合体育大会が県営競技場を中心として開催された際，選手，応援団輸送用の道路(総体道路といわれている)が安田～三内間に急造され，その沿線に最近は宅地用の土地造成が盛んになってきた。さらに市の西部じん芥焼却場や高圧送電線用の鉄脚設置等の公共的な施設がなされてきて，ものすごい盗掘の被害と共にこの方面の埋蔵文化財も次第に消滅の危機にひんしてきた。

そこで青森市教育委員会では一部の土地を借りて，消滅前に正式な発掘調査を実施することにし，青森市文化財審議会にはかった結果，発掘担当者として

青森市文化財審議会委員　小野忠明

同　肴倉弥八

同　井上久

青森市教育委員会社会教育課職員一同

がその任に当ることになった。

今回は昭和42年8月17日から20日まで4日間の発掘調査で，夏期休暇の終りに実施できたことは，参加した高校生諸君には好都合だったと思う。発掘作業は主として県立青森高等学校，同青森西高等学校・同青森工業高等学校・市立第一高等学校・同中央高等学校・県立商業高等学校の郷土部または考古学関係のクラブ員と指導教師にお願いすることにした。青森市教育委員会社会教育課職員一同は今回は発掘担当者として責任を負うことになり，課長福井平内を先頭に課員全員が事務的な手続きのみならず，真写撮影から測量および発掘作業の全般にわたって，例年以上に活動することになった。

発掘調査期間は夏期休暇中でもあり，市街地から距離的にも近い関係もあって，酷暑の最中にもかかわらず参加人員も多く，高校生は延人員278名に達した。また篤志家クラブの先輩の参加も例年以上で，後輩生徒の指導に当ってくださったことに対しては，氏名を別記して感謝の意を表したい。

〔遺跡の位置〕

今回の調査地は青森市大字三内字丸山284番地の渡辺忠一氏所有の畑地内にある。小三内から市営西部じん芥処理場を経てさらに西方に進んだ畑地の終り，林地との交わる地点で，三内霊園からは約1500mの距離の所にある。この付近は一般に小三内と呼びならわされているが，先述の通り，稲荷林（押し流れ）をはじめ本遺跡，さらに土師器を伴う竪穴群やその他数箇所の遺跡の所在が確認されているので，遺跡名が混乱することをさけるため，本遺跡名は大字と小字とを連記して呼称することにした。

三内霊園を含む大三内の台地南側が低く切れて水田となり，そのさらに南側が台地になっているが，これが小三内である。小三内は浪館・安田と連らなり，陸上自衛隊第九師団，県営スポーツ・センターがある。三内霊園と県営スポーツ・センターとを連絡する総体道路（先述）が小三内の台地を走っていて，その周辺で土木工事等のために遺跡が大規模に破壊されている現状である。

これに接続する浪館の陸上自衛隊第九師団は，本部構内はもちろん，広大な演習地の大部分も豊富な遺物包含地上に建設されたもので，今でも時折遺物出土との報に接することがあるが，自衛隊内という特殊事情のためほとんど調査ができかねるというのが現状で，まことに残念に思っている。

〔発掘経過〕

8月16日（水曜日）降雨のため作業中止。

8月17日（木曜日）快晴。

杉林の中を切り開いた畑地（渡辺忠一氏所有）の南側に，幅2ｍ・長さ8ｍのAトレンチを設定し，これを2ｍ×2ｍづつに細分して東西にa・b・c・dの4区に分けた。Aトレンチから約3ｍ距てた北側に2ｍ×10ｍのBトレンチを設定，ABに頭をそろえて東西に2ｍ×2ｍずつa・b・c・d・eの5区に分けた。さらに北側に約3ｍ距てて幅2ｍ・長さ6ｍのCトレンチを設定し，Bbに頭をそろえ東西に2ｍ×2ｍずつa・b・cの3区に細分して発掘作業を開始した。快晴に恵まれて作業ははかどり，表土から平均60cmまで掘り下げた。しかしCトレンチからはほとんと出土品がなかったので，西に2ｍ延長してCd区を設けた。A・Bトレンチからはいくらか出土していたが，それほど多いとはいえない数量である。

この日の出土品は復原可能と思われる土器が3個，石器は石鏃10，石斧5，凹石2の外，ひすい玉残片・へら型石器・石錐・石錘が各1個，土製品は有孔円版1個である。

8月18日（金曜日）快晴

Cトレンチを東に2ｍ延長してCa′区を，Aトレンチを西に4ｍ延長してAe・Af区を設定し，Bトレンチはそのままさらに掘り下げる。しかし出土品は極度に少なく，復原可能の土器は全くなく，石器は石鏃4個，石錐・石匕各1個という結果に終った。

CトレンチのC・a区にかけて柱穴らしいものを6個掘り出したが，竪穴としては堅い地盤もなく，穴の並び方も，不規則な上に，炉跡や焼土・灰の存在も認められなかったので，竪穴とは断定できなかった。

8月19日（土曜日）快晴

A・B・C各トレチンを引き続き掘り下げる一方，A・Bトレンチの西側半分をつないでA′トレンチを設定して掘り下げることにした。出土品は依然として少なく，土器は復原可能のもの1個，石器は石鏃2個，凹石1個にすぎなかった。

ところが午後になって，Bトレンチの中央あたりで表土から32cmの深さから，焼けた丸太の組物がいかだのような形で出土してきた。この焼丸太組物の上部には層位の攪乱も見られず，まさかこのようなものが出土してこようとは思ってもいなかったわれわれは，驚きのあまりしばらくは発掘の手を止めた程である。焼丸太組物がBトレンチから北の方へ延びていたので，B・Cトレンチの間も発掘しなければならなくなり，この作業を最終日に回して作業を終った。

8月20日（日曜日）快晴

最終日。焼丸太組物を掘り上げる必要上，B・Cトレンチ間にBトレンチ設定し，掘り上げると同時にその周辺を調査することにした。焼丸太組物の直下からは岩版・すり石が各1個出土した。

Cトレンチのほぼ中央のb区から炉跡らしいものが出土し，その周辺に柱穴が5個所検出されたが，竪穴としては床面を確認できず不明のまま調査を終ったことは，まことに残念であった。

この日の出土品は上記以外に復原可能土器5個，石鏃4個，石斧3個・土偶・土版・砥石・凹石・石皿（残片）各1個であった。

〔出土品概略〕

本遺跡からの出土品はきわめて少なかったが，一応次のように整理してみた。なお「土器残片による考察」および「石器」の項の記述・実測図は，国学院大学文学部学生石岡憲雄の援助に頼った。又，拓本，実測は，市教育委員会で行なった「埋蔵文化財整理，復原実習会」で高校生の作成したものである。記して感謝の意を表したい。

1．土　器

a．異形土器（写真図版1上）

20日に出土したもので，はじめはにわとりかと思われたが，復原の結果，上部に弓形に湾曲した把手の付いた水差状の土器であることがわかった。

b．土器残片による考察

文様のつけ方と器形によって第Ⅰ類から第Ⅶ類までに区分して考察する。

第Ⅰ類　前期の円筒下層d式（第1図版の1）

器形は深鉢形。口唇部はやや丸みを帯びており，口縁に平行して網目状撚糸原体を4列に押しつけて口辺部文様帯としている。一見した所ではV字形の刺突のようであるが，よく見ると絡状体圧痕の一種であることがわかる。胴部には，むすび目を持った羽状縄文原体を1列押しつけ，その下は2段左撚りの縄状ひもで縦方向に文様を施している。絡状体圧痕と縦方向縄文との間に，2段左撚りの縄状ひもを押しつけることと羽状縄文を施すことで，口辺部と胴部との文様帯の区画を示している。厚さは7㎜程度で，色調は褐色が主体である。焼成は良好である。

第Ⅱ類　中期の円筒上層b式（第1図版の2）

口唇部には1段左撚りの縄状ひもを斜めに押しつけ，その下に3列の押圧を施し，さらにその下には直弧文を加えている。厚さは7㎜程度で，色調は茶褐色が主体，焼成は良好である。

第Ⅲ類　中期の円筒上層C式（第1図版の3）

5㎜程のひも状貼りつけを縦横にめぐらし，貼りつけの上には1段左撚りの縄状ひもを押しつけてきざみをつけている。器面には半裁竹管で施した刺突文様がある。厚さは7㎜程度で表面は黄褐色，内面は灰褐色のものが主体となっている。胎土には多量の砂粒を含んでいるが，焼成は良好である。

第Ⅳ類　沈線を主とした類

a群　大木8b～9式？（第1図版4～12）

なだらかな波状口縁をもち，波状高部には渦巻きがあって，その尾が低部から次の波状高部に続いていて，連続渦巻き文様を形成している。渦巻き部から伸びた尾の一部は，口唇部を通って二重口唇

となっている。胴部には平行した3本沈線をめぐらして，その下に弧状の3本沈線を施す（5・6・9・11）。胴部中央から下半部は入りくんだ曲線文様となっている（7・8・10・12）。沈線の太さは5㎜程度で浅く丸い。地文に撚糸文をもつもの（8・9）は黒褐色で，焼成は緻密である。それ以外で，地文が斜縄文のものは，黄褐色で焼成はあまり良好とはいえず，ややもろい。全体の器形は，口縁部がやや広がり，胴部がややふくらむ深鉢形となるものと思われる。

b群（第1図版13～18，第2図版1～4，11～15）

口唇部に斜めのきざみを施すもので，口唇から2～3㎝のところに3本組の平行沈線を引いている。この点はa群と一致する。色調は暗褐色で砂粒を多く含み，焼成はあまり良くない。

c群（第2図版5～10）

口唇が丸いものである。口唇部の下約2㎝に，これと平行して1本の沈線を施す。上部をすり消したもの（6～8・10）と下部をすり消したもの（5）とがある。色調は暗褐色で，砂粒と小石とを含む。焼成はもろい感じを受ける。

第Ⅴ類　後期（第2図版16，第5図版1）

地文として斜縄文を用いただけのものである。第2図版16は口縁部がゆるやかに外側にそり，胴の下半分がすぼまる深鉢形で，底部は器体に比して小さめのものである。施文原体は2段左撚りのものと思われる。第5図版1は円筒形に近い深鉢形で，口唇部の形状2図版16とは異なるが，胎土・焼成は同一である。小石を含むが堅くしまっていて，色調は黒褐色，施文原体は2段左撚りである。

第Ⅵ類　後期（第2図版17～20）

半楕円形の刺突文を有し，その上部をすり消す手法を使っている（17～19）。器形はく字形に外側にそるもの（17）とまっすぐに立ち上がるもの（18）があって，胴中央部はゆるやかな曲線をえがく器形と思われる。厚さは7～10㎜，色調は褐色で焼成は良好である。

第Ⅶ類　後期の大曲Ⅰ1．2．3相当？

細い沈線で自由な文様を描いたもので，数量的に最も多く，この遺跡の中心遺物ともいうべきである。

a群（第2図版21～23，第3図版・第4図版・第5図版4～21）

暗褐色で，多量の砂粒と2㎜程度の小石を含む。焼成な不良でもろい。器形は変化に乏しい深鉢形が中心をなすものと思われるが，外側にそった口縁をもつもの（第4図版5，ゆるやかなS字状をなすもの（第3図版5）も見られる。沈線は鋭く，折れ口をそのまま用いたような粗雑な感じをうける。口唇は丸いものが多いが，平らなもの（第3図版3）ややとがっているもの（第3図版1）も見られる。折り返えし口縁を持つものもある（第3図版1・4）。

b群（第6図版1～12）

胎土，焼成ともにa群と同じであるのが，沈線間にすり消しの手法を持つものを本類とした。

第Ⅷ類　後期（第6図版13～18）

黒色を基調とした，器面のよく磨かれたものである。波状口縁を持ち，波状高部にボタン状の貼りつけがある。この貼りつけから3～4本の沈線を垂らすもの（13・14）ひも状貼りつけをめぐらすも

の（15・16）がある。15・18は粗雑な剝突を施している。

付記，上述の中，縄文原体に関しては山内清男博士の次の論文に基づいて記した。

「斜行縄紋に関する二三の観察」・史前学雑誌第2巻第3号・先史考古学論文集第五冊に再録

「日本先史時代概説・Ⅱ縄紋式文化」日本原始美術Ⅰ―縄文式土器―講談社・先史考古学論文集新第三集に再録

2．石　器

a．石鏃（第7図版1～13・16）

二等辺三角形で底辺部が浅くえぐりを持つもの（1）舌をもつもの（4～11），舌部の基部にかえしのあるもの（16），舌部を欠いた形のもの（2，3，12，13）などがある。石質は頁岩である。

b．石槍（第7図版17）

頁岩製である。自然面を一部に残し，荒い剝離を施しているが，先端部は少し丁寧に剝離している。

c．石錐（7図版18）

頁岩製である。打瘤痕を残しているが，たんねんな剝離によって鋭い先端部を作りだしている。

d．石ヒ（第7図版19～22）

19は三角形で，両面とも縁に簡単な剝離を施しただけのものであるが，底辺部に小さな剝離を施して使用したものと考えられる。20～22は縦長の剝片を用い，片面に丁寧な剝離を施している。いわゆる縦形石ヒである。20・21は前期に伴うものに似ている。円筒下層d式が見出されているので，これに伴うものかもしれない。

e．刃器（第7図版23～30）

石器として完成品であるかどうか不明な一群で，出土品一覧には入れなかった。するどい刃部をそのまま利用したものや，作りかけのものもあると思われる。27は下端部を片面のみ剝離を施している。頁岩製が大部分を占める。

f．石斧（第8図版1～8）

1，2，7ははまぐり刃がつけられている。3は上部はたたかれた痕跡がある。1，5，6には使用による刃部の欠損がみられる。すべて磨製で，打製のものは見出されていない。

g．石錘？（第8図版9）

長楕円形の長径の両端を欠いている。本発掘では1点のみである。

h．石皿（第9図版2，3）

残片で，完形品はない。

i．砥　石

石斧や玉類を磨く際に用いたもので，岩石の一面に2cm内外の条痕が数本，かなり深く残されている。大きさは30立方cmぐらいである。

j．有孔石製品（第9図版4・5）

イ．うき？（4）

軽石製で½ほどの残片である。漁業用網のうきに使用したものと思われるが確実でないので，出土品一覧には入れなかった。

ロ．ひすい玉（5）

有孔部から下半分だけ出土している。上面がすり切られたかのように残っている。かなり良質のも

のである。

3．土製品

a．土版（第9図版7）

三角形で周囲に2例の円形竹管の刺突を施し，中央部には太い沈線で文様を描いている。裏面は少しくぼんでいて，表裏2枚を貼り合わせて作っおり，内部が空洞になっている。

b．土　偶

やっこだこ状の版状土偶で，縄文式前期と中期の遺跡からは同類のものが割合に多く出土する。

今回の出土品は完形ではなく，腹部から下の部分だけである。

〔遺跡の性格〕

小三内一帯は一大遺跡である。先述の稲荷林から丸山にかけては，縄文式前期（円筒下層式）から中期（円筒上層式）の土器を中心とする包含地が群在する。ともかく掘れば必ず出土品があるというので，心ない人々の盗掘も多いのが悩みの種だ。

今回の丸山遺跡は杉林を切り開いて畑にした地域で，比較的浅い包含層の上部は開墾の際すでに被害を受けていたものと思われる。地層は部分的には変化があるが，大体次の5層に分けられる。

第1層（耕作土），第2層（黒褐色腐蝕土）第3層（茶褐色土）第4層（黒色土），第5層（砂質黄色土），この下が粘土層である。粘土層までの深さは1ｍ前後である。以上の中，第3層までが包含層であるが，特に第3層の真中あたりに火山灰が約6cmの厚さで，継続した層を形成しているのが注目された。火山灰層までの深さは65cm前後であった。

この火山灰は八甲田山噴火の際に堆積したものと思われる。火山灰の層が土器の形式を分ける境界の役割をしていることもあるので，慎重に調査してみたが，その下で土器形式が変化しているとは確認できなかった。焼丸太組物の出土層は第2層で，第3層に少し食い込んでいた。

つまり本遺跡は中期の円筒上層各形式を中心とした遺跡で，それに前期の円筒下層式の最終形式ともいうべきd式と，後期形式の土器とを少量含んでいる。最終日の8月20日に出現した炉跡と柱穴は，おそらく縄文式中期その竪穴であろうと思うが，当時の住民の床面をロームの粘土層まで掘り込んでいなかったため，入念な調査にもかかわらず床面を確認できずに終ったことは残念であった。第2日（8月18日）に出土した柱穴は，おそらく土師の竪穴に伴うものであろうと思うが，土師の遺跡そのものはもともと浅い所にあるものであるし，開墾の際に表土がけずられて消滅してしまったものと思われ，土師器・須恵器の残片すら確認できなかった。

また焼丸太組物の正式な名称，その用途等についても全く不明である。ある人は，最近まで死者を火葬にするものに野原へ丸太を組んで死体を乗せ，丸太組物もろとも焼いてしまったもので，今回の出土品もおそらくそれに違いないという。しかし発掘経過の個所でも述べた通り，その上部の土層には攪乱が見られず，焼丸太組物そのものも炭化はしているものの，木材の形態をそのまま残していたので，火葬のような高熱で焼いたものとは思われない。

往時は小三内の台地一面に縄文時代人が住みつき，大三内との間の現在の水田まで海水が侵入していたと思われるので，この台地の縄文時代人たちは，山の幸，海の幸に恵まれながら，かなりの長年月に渉って生活を営んでいたものと思われる。それにしては，当然あるべきはずの貝塚の所在があいまいなのは何かしら気になる。今後の調査研究にまちたい。

〔おわりに〕

以上で丸山三内遺跡の調査概報を終る。今回の調査でも，生活の本拠ともいうべき竪穴が確認できなかったことが，われわれを最後まで苦しめた。洪積ロームの粘土層に掘り込まれた竪穴はわかりやすいが，沖積土層中に作られた竪穴はわかりにくい。それに包含層が浅い所にあり，開墾による直接，間接の被害も多く，調査に悪影響を与えていたことも否定できない。また，焼丸太組物という正体不明の出土物があったりして，調査を一層復雑なものにしてしまった。

それにしても出土品が少ない遺跡の発掘というものは，人々の心を引き止める魅力に乏しいのはわかるが，発掘に従事する高校生のメンバーが毎日変るといってもよい位で，クラブの先輩諸氏が腰を落ち着けて発掘しているのと較べて，何とも物足りない気がした。しかし夏休みが終るまぎわの，しかも酷暑の中を一心に発掘作業に従事してくれた高校生諸君，先輩諸氏，引率に当られた先生方，わざわざ来訪してくださってわれわれを元気づけてくれた諸氏に対して，今回もまた深く感謝の意を表したい。

この遺跡に近く，土師器・須恵器を伴う竪穴群の存在も確認されているので，今後はその方の調査をも行ない，一大遺跡群の全ぼうを明らかにしたいと思っている。それにしても，盗掘を防ぐ最良の策はないものであろうか。

総務・発掘指導	小野忠明	
記録整理・本文執筆	井上久	
写真撮影・編集校正	塩谷隆正	
測量	今村勉	
拓本・実測指導	石岡憲雄	
庶務	青森市教育委員会事務局社会教育課	

発掘参加者一覧

○ 発掘担当者　市文化財審議会委員　小野忠明
　　〃　井上久

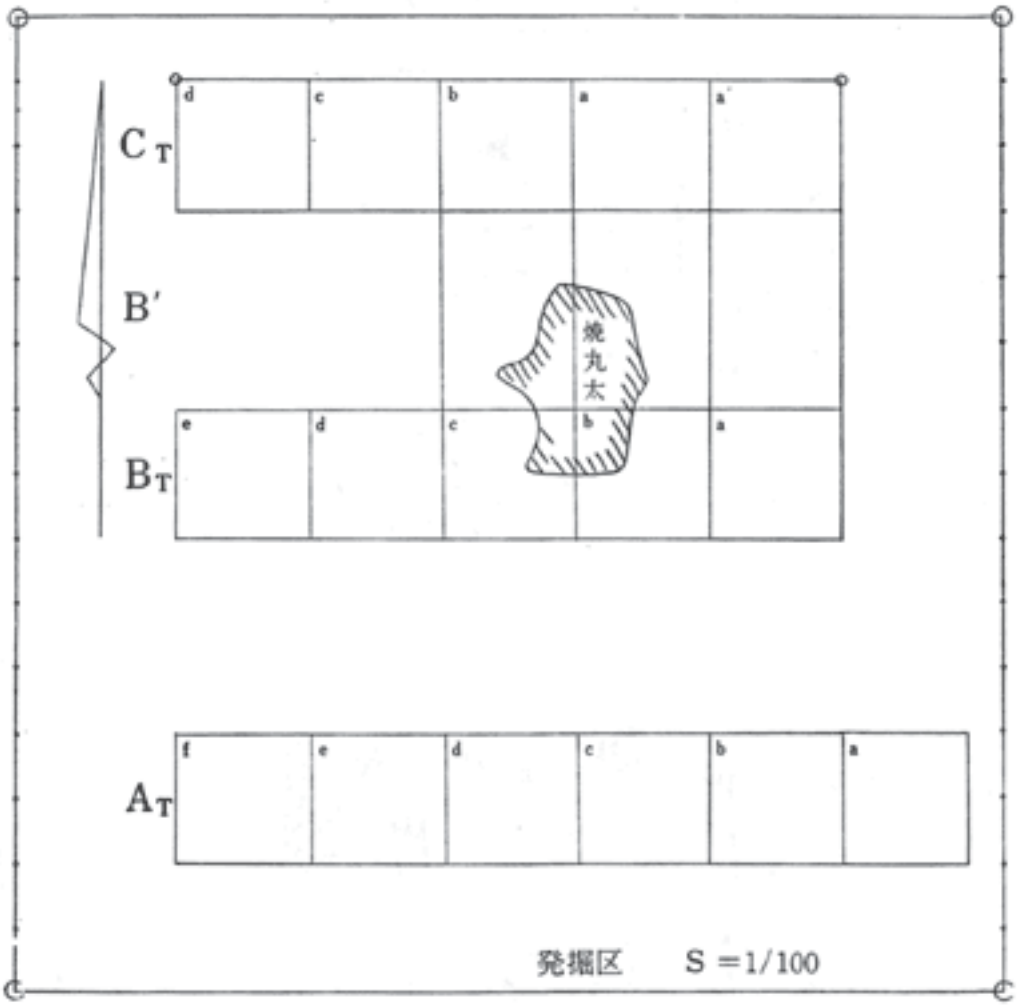
○ 発掘参加者

名久井文明　中川秀夫　三上賢逸
工藤正一　石岡憲雄

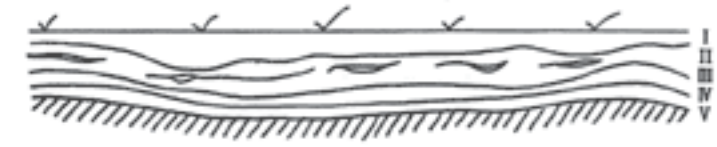
青森商業高校	部長	棟方清隆	他9名
青森第一高校	部長	藤本治郎吉	他17
青森工業高校	部長	田島悦郎	他17
青森中央高校	部長	山口恭子	他11
青森西高校	部長	副田順子	他6
青森高校	部長	川村初男	他10

○ 市教委事務局

社会教育課	課長	福井平内
	課長補佐	木村忠一
	係長	長尾雅裕
	社教主事	斎藤直
	職員	秋村トシ
	〃	塩谷隆正

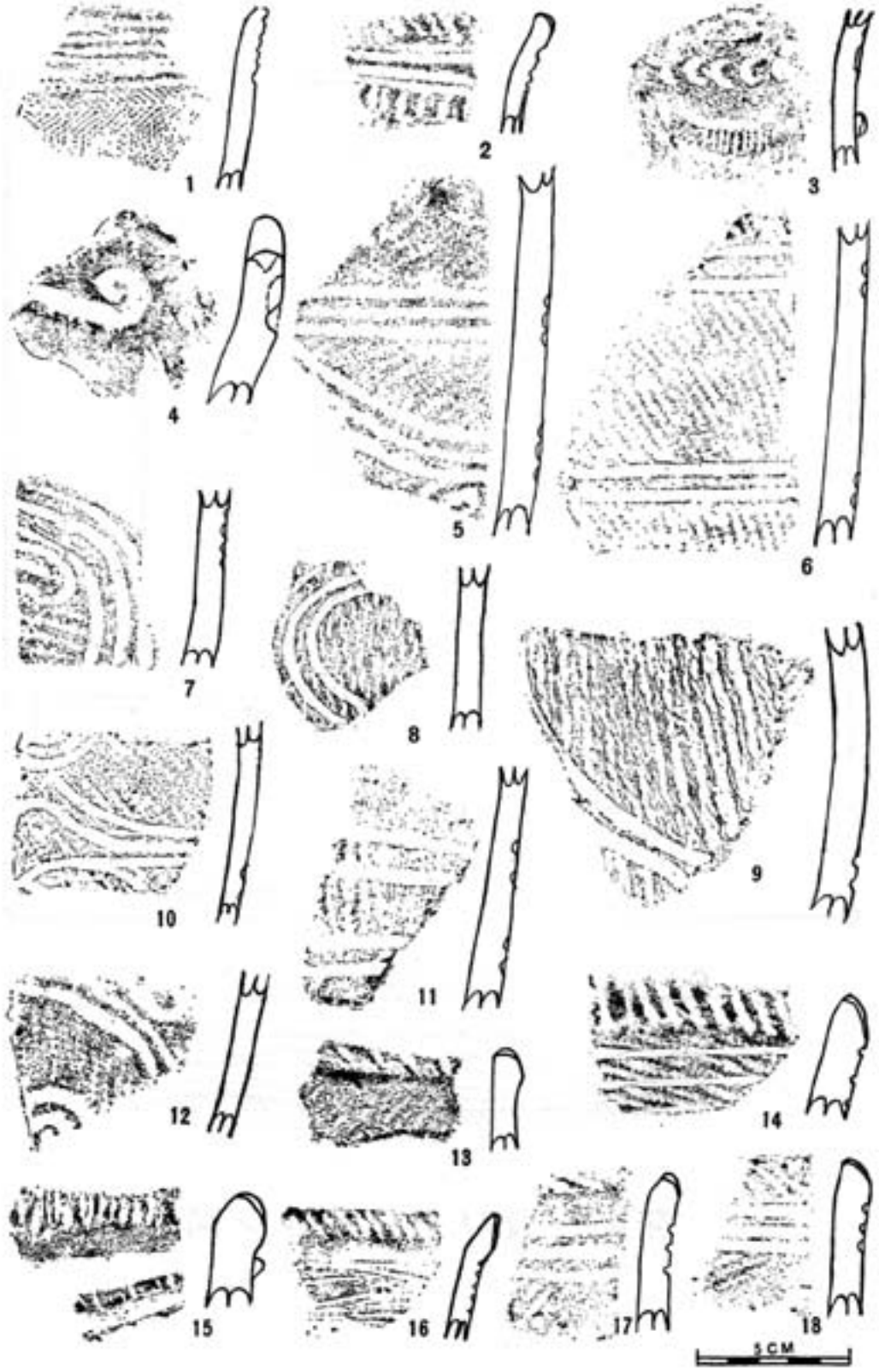


Cトレンチ北壁セクション図

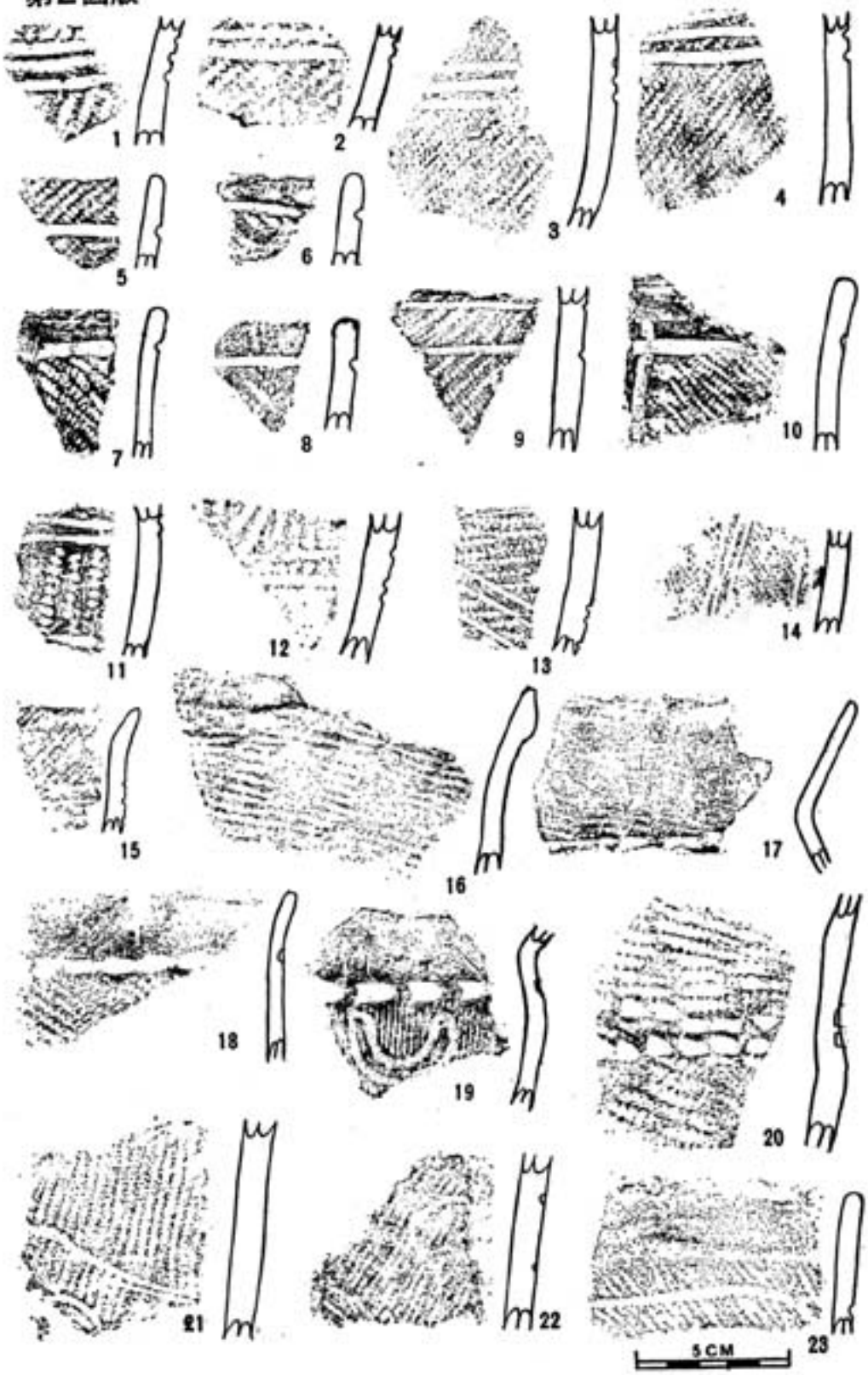


発掘区及びセクション図

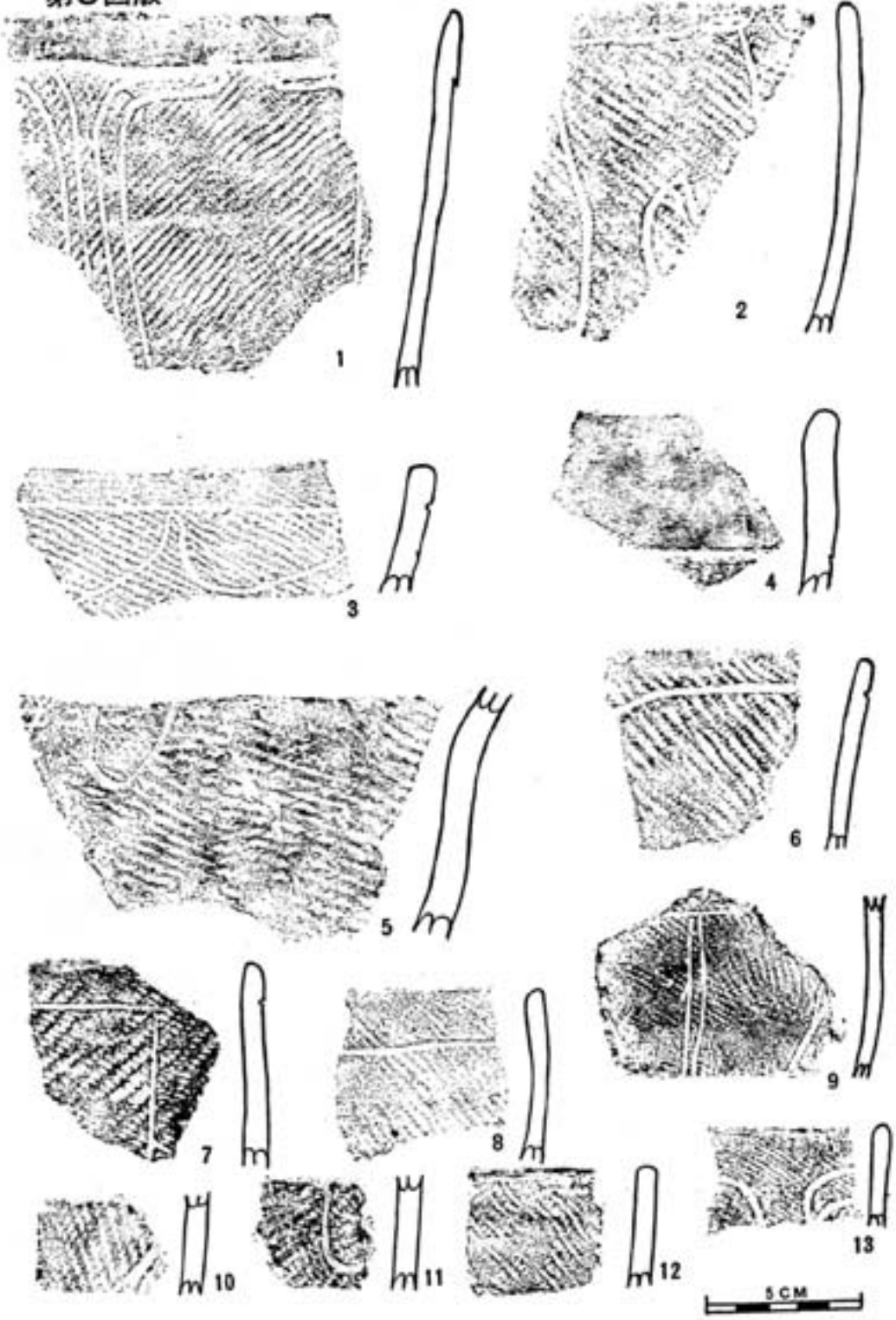
第1図版



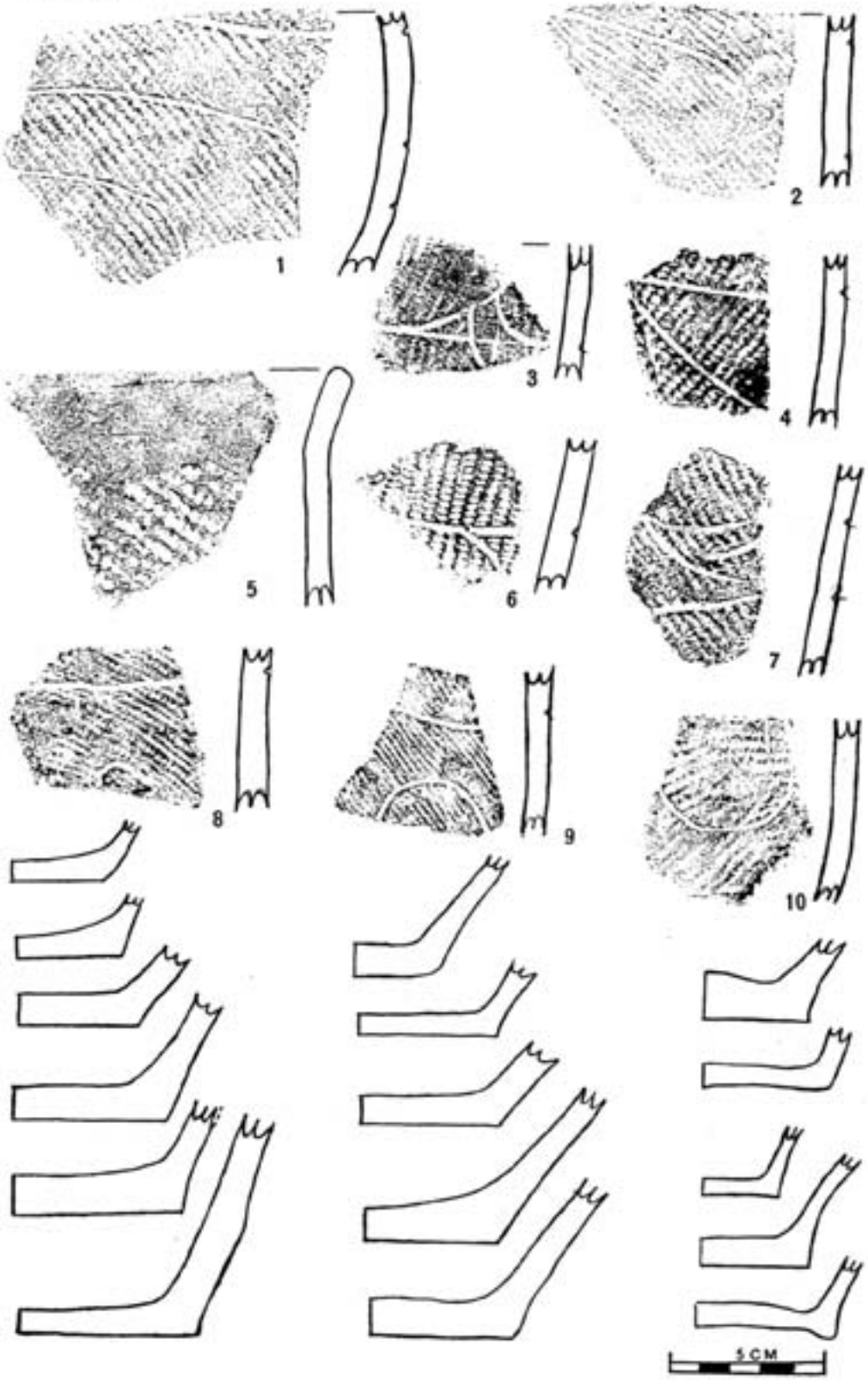
第２図版



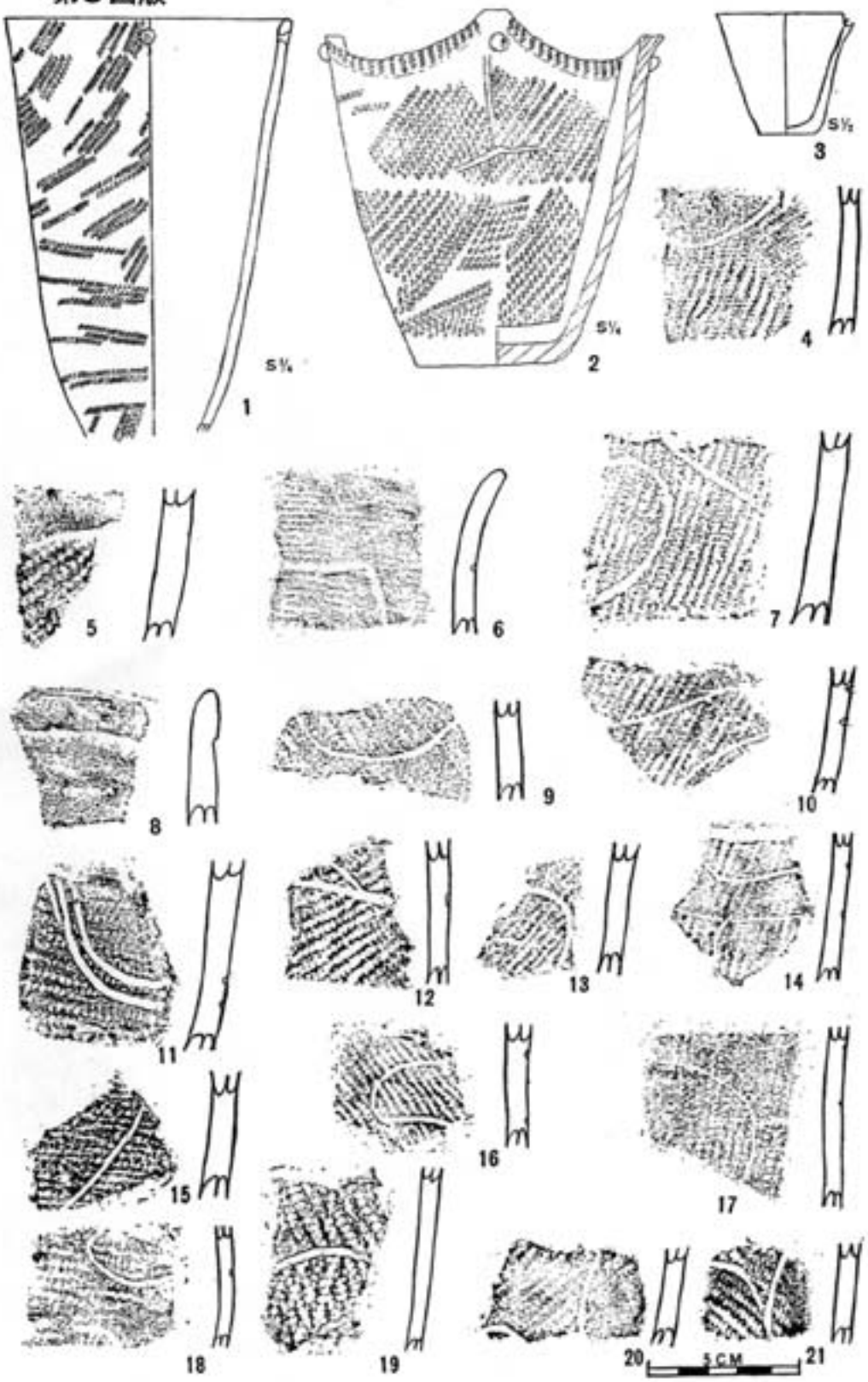
第３図版



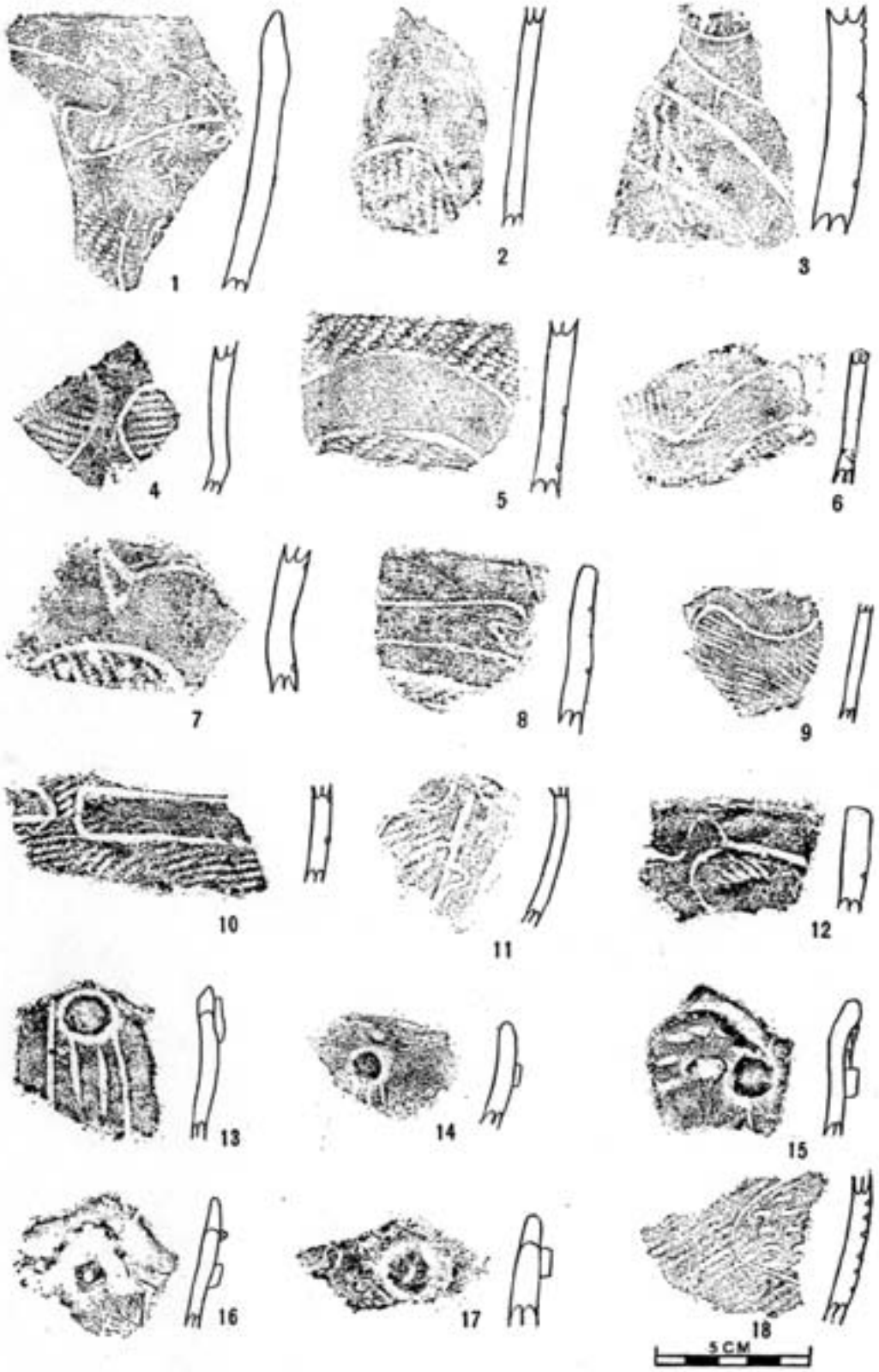
第４図版



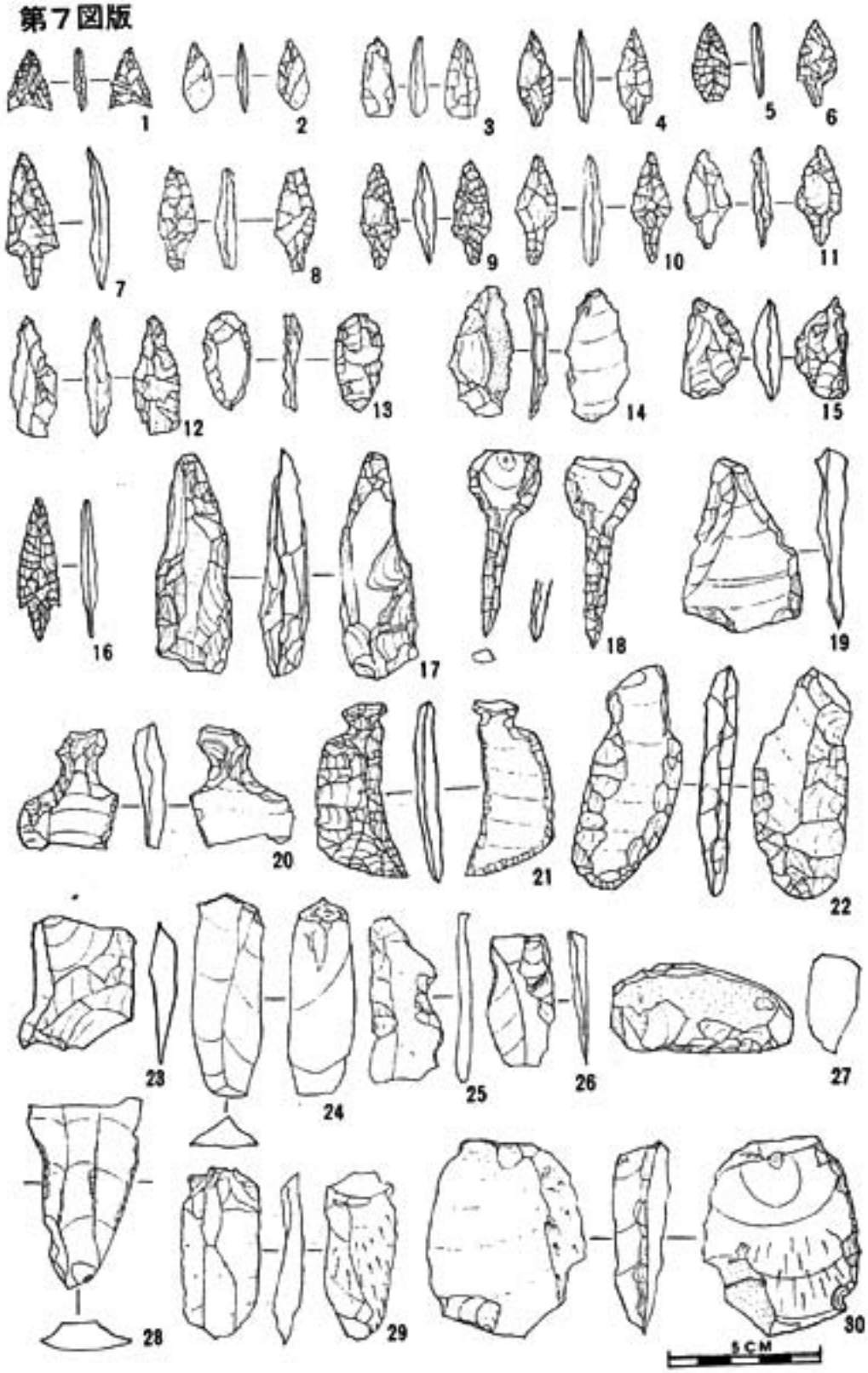
第５図版



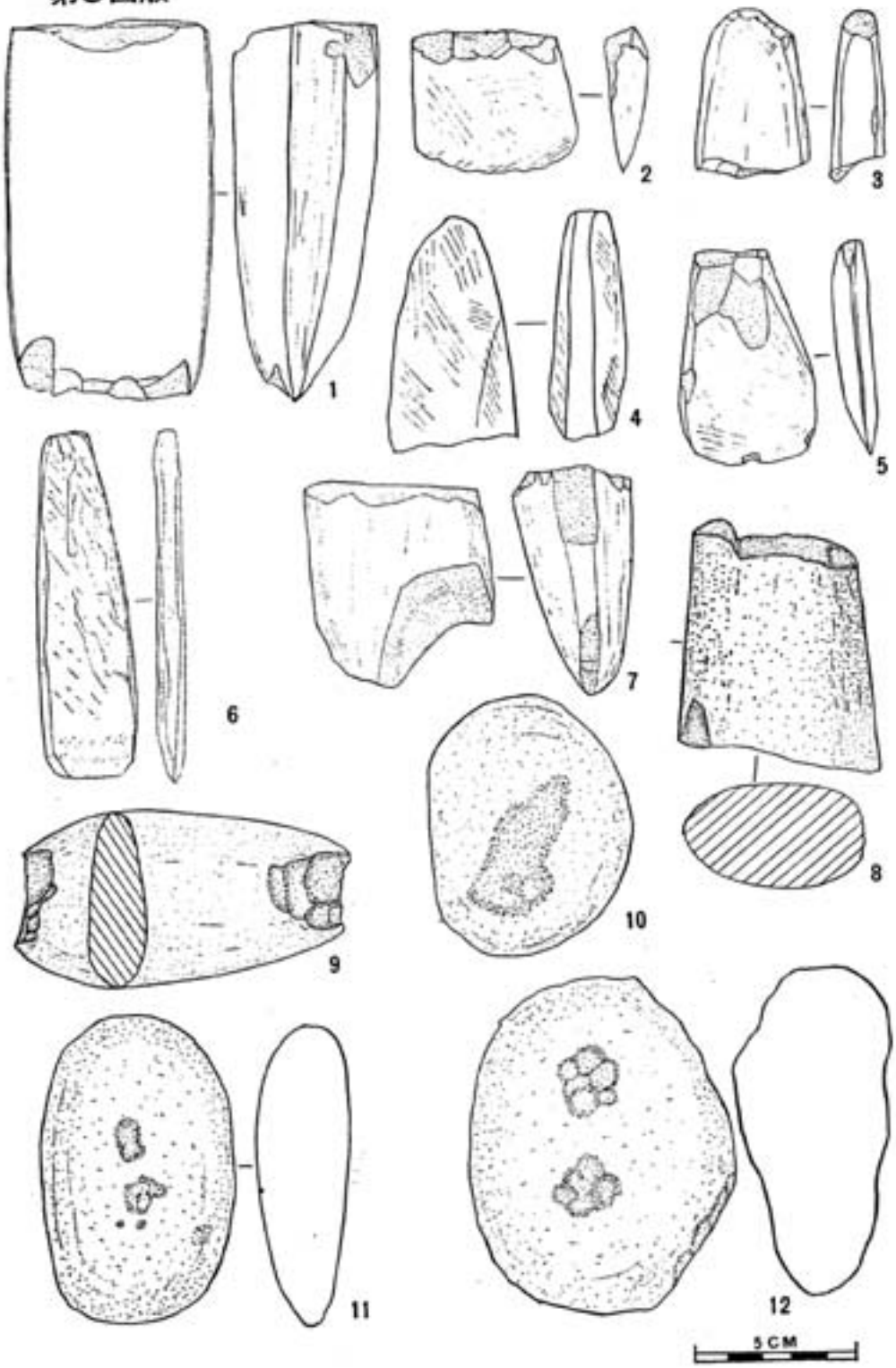
第６図版



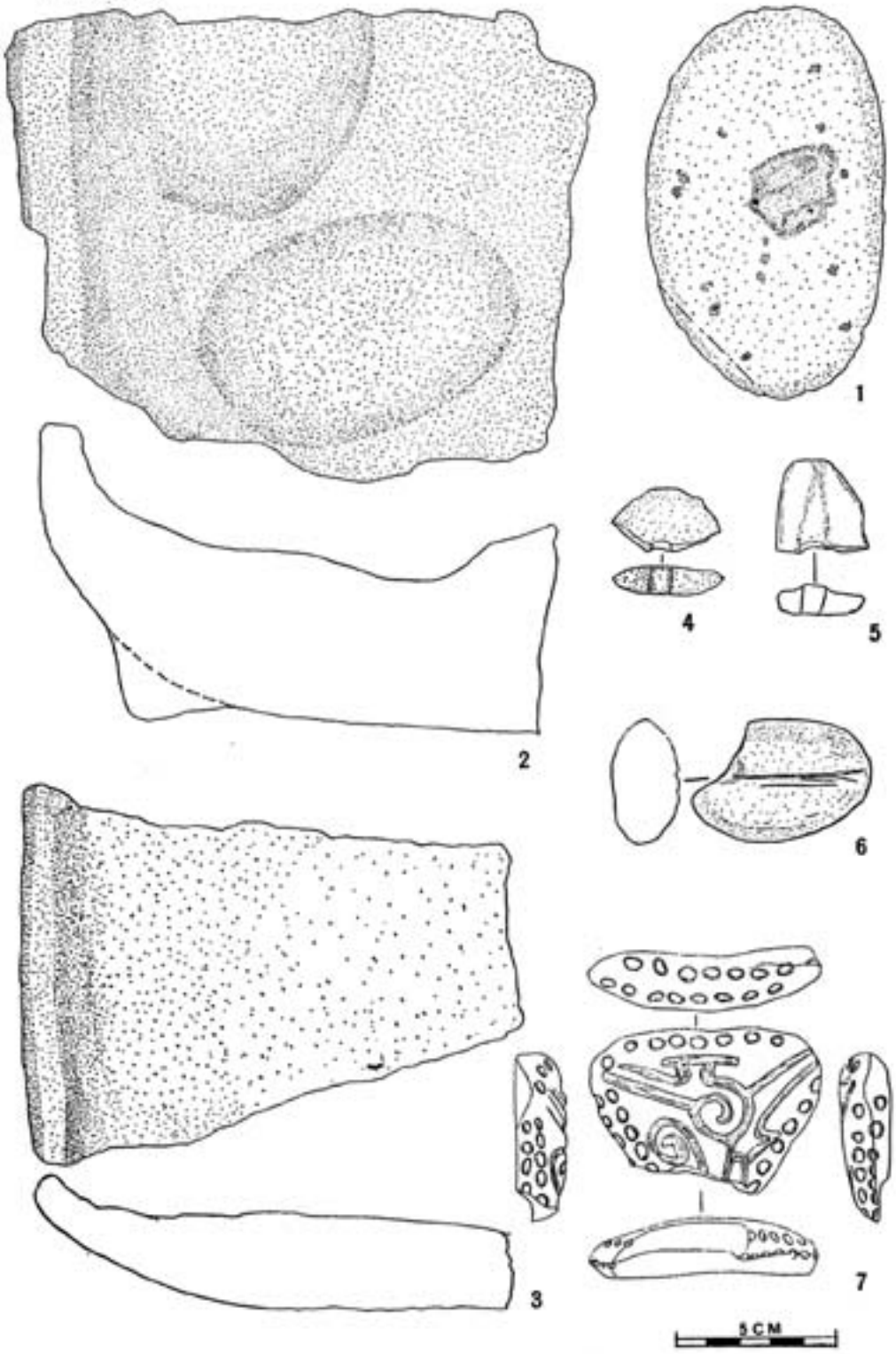
第７図版


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
5CM

第８図版



第９図版



写 真 1

異形土器出土状態
右下が口，左上が把手部となる
底部銅代痕が見える。

底部出土状態
銅下半部より切り取り周囲は
すられていた。

写 真 2

石 皿 出 土 状 態

倒 立 し た 手 周 土 器

写 真 3

石皿かと思われる中央に

凹だ石製品

版 状 土 隅

中 央 は 石 鏃

土 器 出 土 状 態

焼 丸 太 組

写 真 4

土器出土状態

青森市の文化財 4
三内丸山遺跡調査概報
昭和 45 年

発行所　　青森市教育委員会